審査の結果の要旨

氏名　　フダコーン　オンアート

タイは日本とともに、戦前アジアの中で植民地化を免れた数少ない国であるが、その首都バンコクは、ちょうど日本における明治ー大正と同時期に本格的な都市近代化に着手している。明治日本よりも直接的に植民地化の脅威にさらされていたタイにおいて、都市の近代化が誰の、どのようなビジョンに基づいて進められたかというのは非常に興味深い問題である。近代都市バンコクの成立過程における極めて重要な転機は、19 世紀後半に進められた交通インフラの近代化であるが、これまでバンコクの交通網体系の近代化がどのようなプロセスで、またどのような計画的意図に基づいて為されたものか、充分な知見は得られていなかった。

本研究は以上の認識に立ち、バンコクの近代化に大きな役割を担ったと見られるラーマ V 世治世下（1868-1910）における、バンコクの交通ネットワークの形成過程を明らかにするとともに、その背景にある計画的意図の考察を試みたものである。

分析の対象としている交通モードは道路（街路を含む）、運河、鉄道、路面電車である。これまでの近代バンコク都市史研究は、経済史的、都市地理学的、あるいは社会学的関心に基づくものがほとんどで、交通インフラの近代化、特に交通モード相互の連絡や全体の交通網体系、及びその計画プロセスに対しては概ね無関心であった。その点、バンコク近代交通網全体の形成過程を計画史として明らかにしようとする本研究の姿勢は、既往研究に比して新しいアプローチを示すものであると言える。

まず第二章では、近代化以前のバンコクの交通網形成について概説している。特に、バンコクの都市構造がアユタヤをモデルにして、即ち水の交通ネットワークを基盤として形成されたこと、そしてこの考え方はラーマ V 世の時代においても継承されていることを指摘している。

第三章では、バンコク及びその郊外の道路網形成に関する分析を行っている。ここではラーマ V 世治世時に目覚しい道路開発が行われた事実を明らかにしており、特に建設目的、手法、道路タイプの三項目に着目して道路年表及び図として整理している点が貴重な成果である。この年表と図は本研究の重要な成果の一つであり、今後のバンコク都市史研究において重要な基礎データを提供するものであると評価できる。

第四章は、交通網の計画コンセプトの考察及び交通網形成過程における西欧技術の影響の考察にあてられている。各交通モード（道路、運河、鉄道、路面電車）の分析により、バンコクの交通網は水上交通と陸上交通の結節点における乗り換えを前提とした、水陸のコンビネーシ

ョンとして計画されたことを論じている。またラーマ IV 世期に水運の計画目的が一般交通・軍事から土地開発・農産物運搬に変化したが、さらにラーマ V 世期には西欧技術が導入されて、大規模な農地開発のために多くの運河が整備されたことを指摘している。また鉄道は、英仏による植民地拡張への防備を意図しつつ、水上交通に替わる軍事輸送手段として導入されたことを明らかにしている。

第五章は、バンコクの近代化を進めたキイ・パーソンに関する考察である。ラーマ V 世が意志決定者、プランナーを兼ねた最大のキイ・パーソンであったこと、また外国人エンジニアもバンコクの交通網発展に一定の役割を果たしてはいるが、それぞれの技術者の滞在期間は短くその仕事も個々の施設の設計に限定されていたため、キイ・パーソンと言えるほど大きな役割を果たした人物はいないことが明らかにされている。さらに、ラーマ V 世は西欧都市計画の思想を取り入れてバンコクの交通施設や交通網の改良を試みたが、その結果、従来の水上交通と西欧の影響を受けた陸上交通が融合した交通網が誕生したこと、その背景として、ラーマ V 世の二度にわたる訪欧経験が大きく影響している可能性を指摘している。

第六章ではラーマ V 世の後のバンコクについて概説しており、バンコクの主な交通モードが水運から陸運に切り替わった経緯がまとめられている。

第七章では結論を述べている。バンコクの交通体系が、西欧技術の導入により水運主体から水陸交通のコンビネーションへ変容したこと、それが陸上交通と水上交通の結合というラーマ V 世による構想に基づいていたことを明らかにした点は、本研究の最も重要な成果である。またラーマ V 世は西欧の技術やコンセプトを用いて、バンコクの交通網の改良を実践したが、西欧技術の導入は具体的な設計や建設レベルにとどまっており、計画思想の根本にまでは影響を与えなかった（従前の水運中心の交通網と、道路・鉄道等の西欧技術による陸運体系とを共存させた）と結論付けている点は興味深い見解である。

本研究の優れている点は次の三点にまとめられる。第一に、道路、運河、鉄道、路面電車を対象に、ラーマ I 世からラーマ V 世期に建設あるいは計画された判明する限りの路線について、建設目的・建設手段・タイプ等の項目に基づいて整理した年表及び図を作成した点である。これは、バンコク近代都市史研究にとって重要な基礎データを提供するものであり、本研究の大きな成果である。第二に、アジア全体の植民地化が進む時代背景にあって、バンコクは欧米の計画や設計をとりいれながらも独自の近代化路線を実現していたこと、そしてそれがラーマ V 世のビジョンに基づいていたことを示した点である。最後に、ラーマ V 世のビジョンが、道路・鉄道・路面電車といった近代交通モードと近代以前の主交通モードであった水運とがそれぞれ役割を分担しながら、一体としてのバンコク近代交通網形成を志向し、実現したことを論じた点である。

これらの成果は、現在決して充分であるとは言えない近代バンコク都市計画史の今後の展開に資する、重要な基礎的知見をもたらすものと高く評価することができる。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。